

『般若心経』について (九)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (6)

1 1. 「三世諸仏」について

「三世」とは「過去・現在・未来の3つの時間区分」を言います。仏教の伝統では、一つの三千大千世界には、同時に二人以上のブッダが出現することはない、という原則があります。この「世界」とは、須弥山という山を中心としてその周囲に海と四大陸がある世界です。太陽や星々を伴っていますので、今の感覚で言うと一つの太陽系ぐらいの規模ででしょうか。私たちのいる世界の名を「娑婆世界」といいます。「娑婆」とはサンスクリット語の「サハーsahā」の音写語で、「耐える」ということです。「苦しみに耐え忍ぶ世界」を意味しますので「忍土」と訳されることもあります。

このような世界が1000の3乗、つまり10億個集まったのが三千大千世界です。一つの銀河系ぐらいの規模に相当するでしょうか。一人のブッダの教化の力は、この三千大千世界に及ぶので、この中に同時に二人のブッダが存在する必要が無かったわけです。

一方、時間的に見ると、過去に別のブッダがいたこともあり、また未来に別のブッダが出現することもあります。この場合、過去とは昨日や数年前のことではなく、未来も明日明後日のことではありません。「劫(カルパkalpa)」という極めて長い時間の単位を念頭に置いています。劫とは例えば「芥子劫」の説では、四方上下1由旬(ヨーjanaという距離の単位、約8-9マイル=12.8-14.4kmとされるが、日本の2里=8km程度という説もある)の鉄の城内に芥子粒を一杯にして、百年ごとに一つの芥子粒を取り去ります。そうやって芥子粒全部を取り終わっても、まだ一劫は終わらない、というものです。また「盤石劫」の説では、四方1由旬の大岩石を百年に一度ずつ毛布のような物でササッと払って、その石がすり減って無くなってしまっても、まだ一劫は終わらない、というものです。

ちなみに、大乘仏教において菩薩が修行して悟りに到達し、ブッダになるまでにかかる時間を「三阿僧祇劫」と言います。「三」は数字の3、「阿僧祇」はインドの数の単位で、10の59乗を意味します。従って「三阿僧祇」とは、3の後ろにゼロが59ついた数です。大乘仏教では、それだけの「劫」を掛けて修行すれば、誰でもブッダになることができる、としたのでした。普通これだけ時間がかかれば、「永遠にブッダになれない」というのとほぼ同じことになりませんが、輪廻転生は永遠に続きますので、それに比べれば成仏までの時間は、どんなに長くても時間が限られている分、「永遠よりは短い」わけです。

さて、この娑婆世界には、お釈迦様の前に6人のブッダがいました。そのうち前の3人は、前の劫(過去莊嚴劫と言います)に出現し、後の3人とお釈迦様は現在の劫(現在賢劫と言います)の間の出現です。未来には、ただ今現在、空の上の方の世界で修行中の弥勒という菩薩がブッダになる予定です。ただし少し先の話で、56億7千万年(または5億6千7百万年)後のことです。お釈迦様がおられなくなった後、このように長い間ブッダが不在になりますので、その間はお地蔵様などの菩薩が救済の活動を行うことになります。

一方、現在この三千大千世界にはブッダがいなくとも、別の三千大千世界には現在も別のブッダがおられるのではないかと、いう考えも現れました。そうして出現したのが、阿彌陀如来や薬師如来などのブッダです。この方々は、娑婆世界からずっと遠く離れた(ガンジス河の岸辺の砂粒ほどの数の世界を越えて行かねばなりません)、極楽世界とか浄瑠璃

世界とかに現在もお住みになって、教えを説いておられます。そこに行って直接教えを聞くことができれば、ブッダになるための修行を速やかに進めることができます。これは成仏までに必要とされる、べらぼうに長大な時間を短縮するための一つの考えでした。

1 2. 「依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提」について

それらすべての三世の諸仏は皆、般若波羅蜜多に依拠して、この上無く、正しく完全な悟りを悟られた、と説いています。実にブッダの悟りとは、すべて「智慧の完成」に依拠することによって到達されるのです。

「阿耨多羅」とは、「この上ない」「無上の」を意味するサンスクリット語の「アヌッタラ(anuttara)」の音を写した音写語です。「三藐」も「正しい」を意味するサンスクリット語「サミヤク(samyak)」の音写語、「三菩提」も「サンボーディ(sambodhi)」の音写語です。「三菩提」の「三」は、「完全に」とか「一緒に」「共に」を意味するサンスクリット語の動詞接頭辞「サム(sam)」の音写語、「菩提(ボーディbodhi)」は「悟り」のことですから、「完全な悟り」という意味になります。「三つの悟り」ではありません。

1 3. 「故知」について

サンスクリット原典では「従って知るべきである」です。誰が何を知るべきなのか。

まず「何を」知るべきなのか、というと、これは「次の文章の内容」に他なりません。「以下のことを知るべきである」と説いているわけです。

では「誰が」知るべきであるのか。「知るべきである」主体は文中には明示されていません。誰か別の第三者ではなく、今ここでこの経典を読んでいる他ならぬ私たち一人ひとりが、経典の最後のまとめとして次のことを明瞭に知るべきである、と説いているのです。

1 4. 「般若波羅蜜多。是大神咒」について

漢訳では「般若波羅蜜多は、これ大神咒であり」となっています。「般若波羅蜜多」が主語で、述語が「大神咒、大明咒、無上咒、無等等咒、能除一切苦」である、と読めます。

サンスクリット文では一般的には prajñāpāramitā (般若波羅蜜多) と mahāmantra (大神咒) を複合語にして、「智慧の完成の大なる真言(中村・紀野訳 p.15)」「般若波羅蜜多の大なる真言(立川訳 p.9)」と訳しています。チベット語訳でも属格の助辞を用いて、「智慧の完成の真言 śes rab kyi pha rol tu phyin paḥi snags」となっています。

宮元啓一氏はこれに異議を唱え、prajñāpāramitā と mahāmantra とを二つの主格の言葉に分けて漢訳のように主語・述語関係で理解し、「般若波羅蜜多は大なる真実のことば(マントラ、真言)であり」と訳します(宮元氏『般若心経とは何か ブッダから大乘へ』 p.129)。さらに『般若波羅蜜多の大なるマントラは』というふうに訳す学者もいますが、これがまったくの誤訳であることは、今や明々白々と述べています(同書 p.130)。これは、波羅蜜とは「何がなんでも守り通すこと」であり、かつ「何が何でも守り通して真実(サツティヤ)となった誓いのことば」である(同書 p.64)との、氏の見解に基づくものです。

私は、ここで言う真言とは「智慧の完成」を凝縮した、経典の最後の「揭帝 揭帝 般若波羅揭帝 般若波羅揭帝 菩提僧莎訶」がそれに当たると考えます。従って「智慧の完成の[すべてを凝縮した]真言」という訳でも良いのではないかと思います。また「智慧の完成」と「真言」を同格に取って、「智慧の完成である真言」でも良いと思います。日本語の「の」には「同格による限定」の意味もあります(『広辞苑』)から、「智慧の完成の真言」=「智慧の完成である真言」の意味になるのではないのでしょうか。「智慧の完成」と「真言」の語を属格の助辞によって繋げているチベット語訳も、そのように理解することが可能です。